

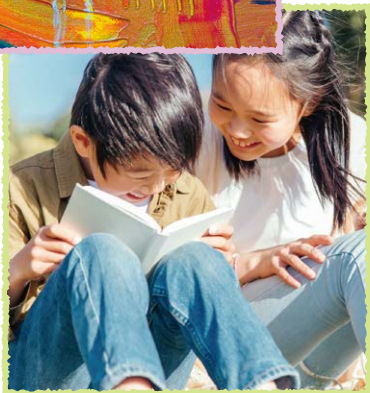


ことてとて

KOTOTETOTE

子供向け芸術文化体験コーディネーター  
「ことてとて」養成プログラム

2025年度事業報告書



## はじめに

東京都は、より多くの子供たちへ芸術文化体験を届けるため、今年度「東京こども芸術文化プラットフォーム『TOKYOカルチャーデビュー』」をアーツカウンシル東京に立ち上げました。子供たち一人ひとりが「自分だけの特別な体験」の機会を得られるように、プログラムの開発や広報、人材育成などを一体的にコーディネートしていきます。

その一環として、担い手となる子供向け芸術文化体験コーディネーターの養成プログラムを開始いたしました。都内のあらゆる地域へ体験機会を広げていくためには、より多くの担い手の存在が欠かせません。

このプログラムでは、「子供」の特性に焦点を当てることを第一に、子供とのかかわり方や成長に与える影響、社会課題解決へのアプローチといった視点を取り入れました。多彩な子供向けプログラムを幅広く展開し、第一線で活躍する講師陣からのレクチャーやワークショップによる「基礎講座」、実際の子供向けプログラムの現場を視察する「現場研修」、各講座で得た学びや気づきを他の受講生と共有し、ネットワークの構築と今後の実践活動につなげる「振り返り共有会」の3つのカリキュラムを通じて、地域の現場とアーティストやエデュケーター等をつなぐ橋渡しができる人材の育成を目的としています。

令和7年度は8月1日から約1か月間募集を行い、定員の3倍近い82名の応募がありました。書類選考を経て、多種多様なバックグラウンドを持つ33名が第1期生として選考され、本プログラムを受講しました。芸術文化の中でも美術、音楽、演劇、舞踊、伝統芸能など幅広い分野に携わる受講生が集まりました。地域の文化施設・文化財団で芸術文化の専門家として働く職員や、学校や教育の現場で日々子供と向き合う教職員、子供に向けた活動を行う企業や団体の職員など、それぞれの経験や視点の違いを活かしながら、グループワークやディスカッションを重ね、コーディネーターとしての自分自身の役割や、今後の目指す姿を具体的に描くことができるようになりました。

すべてのプログラムを履修した子供向け芸術文化体験コーディネーターを、「ことてとて」という愛称で呼んでいきます。「ことてとて」の皆さんが、それぞれの現場で活躍し、子供たちがより豊かな経験を積み重ねられる場を生み出してくれることに期待するとともに、より多くのコーディネーターが今後さらに増える機会となれば幸いです。

あらためまして、本講座の運営にご尽力くださった多くの関係者の皆さまに心よりお礼を申し上げます。

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団  
アーツカウンシル東京

## 目次

はじめに	01
目次	02
1 事業概要	03
2 受講生募集及びカリキュラム概要	04
3 カリキュラム	05
(1) 基礎講座 概要	
第1回基礎講座	06
第2回基礎講座	09
第3回基礎講座	13
第4回基礎講座	17
第5回基礎講座	21
第6回基礎講座	25
(2) 現場研修 概要	29
東京芸術劇場 託児型ワークショップ「こどもあそびシアター」	30
東京都、アーツカウンシル東京 ほか ネクスト・クリエイション・プログラム	31
東京文化会館 ミュージック・ワークショップ	33
東京芸術劇場 劇場ツアー「コンサートホールを歩こう」	35
芸術家と子どもたち アーティスト派遣型ワークショップ 「PKT(パフォーマンスキッズ・トーキョー)」/ 「ASIAS(エイジias)」	36
くにたち未来共創拠点 矢川プラス 絵本作家はたこうしろう ハロウィーンワークショップ 「世界にひとつのヘンテコぼうしをつくろう」/ ランチタイムコンサート「クラシックライブPLUS」	37
フレール館キンダーブラッツ アリオ葛西店 「まんげきょうづくり」	38
(3) 振り返り共有会	39
4 受講生アンケート	41

# 1 事業概要

東京都とアーツカウンシル東京は今年度より、子供たちへ良質な芸術文化体験を届けることを目的に、地域の現場とアーティスト等をつなぐ橋渡しができる人材を養成するため、子供向け芸術文化体験コーディネーター「ことてとて」養成プログラムを開始しました。

本プログラムでは、芸術文化体験の重要性や課題、ニーズを踏まえつつ、地域等でプログラムを実施するために必要なスキルやマインドを学びます。

専門家からの講義やワークを通じ、講師・参加者同士の議論やネットワークの構築などを支援することで、受講生自らが、それぞれが有するバックグラウンドで子供たちの芸術文化体験を実現できるよう、課題解決に向けた場を提供します。



## 「ことてとて」とは？

こどもたちの「こ」、子供たちが体験する創造的な「こと」、そして「こと」を支えるたくさんの人の「てとて(手と手)」、それらをつなぎ、紡いでいく取組をイメージして名付けました。

コーディネーター養成プログラムの履修者を「ことてとて」という愛称で呼んでいきます。

## ロゴデザインについて

赤は「情熱・エネルギー」

青は「誠実性・信頼感」

水色は「ひらめき・軽やかさ」

緑は「成長・調和・つながり」をそれぞれ象徴しています。

# 2 受講生募集及びカリキュラム概要

応募資格	地域の現場等でプログラムの実践をめざす、区市町村や文化財団等の文化事業担当者、文化施設の職員、教員・教育関係者、子供向けの活動を行っている企業・団体スタッフ等で、次の(1)～(4)の要件を満たす方  (1)子供に対する芸術文化体験プログラムの重要性を理解し、主に東京を活動拠点とする方 (2)子供を対象とした芸術文化体験プログラムの実践に意欲がある方 (3)原則としてすべてのプログラムに参加し、講師及び他の受講生と積極的に交流や議論ができる方 (4)受講後も芸術文化の振興に資する活動に携わる意思がある方
------	--

募集人数	30名
応募方法	公式ホームページのフォームから申込
受講料	無料
募集期間	2025年8月1日(金)から8月29日(金)17:00まで
オンライン説明会	2025年8月9日(土)14:00~15:00
応募人数	82名
選考	応募資格(1)～(4)の視点に基づいて選考
受講生の属性	33名 区市町村や文化財団等の文化事業担当者 文化施設の職員 教員・教育関係者 子供向けの活動を行っている企業・団体スタッフ

カリキュラム	(1)基礎講座(全6回): 2025年9月27日～11月7日 さまざまな場で子供向け事業に関わる講師陣からの、子供の芸術文化体験の意義や実践例等によって、事業をコーディネートするための基礎的な知識と考え方を座学形式で学びます。  (2)現場研修: 2025年10月～2026年1月 都立文化施設やアーツカウンシル東京の事業において、実際の子供向けのプログラムの現場を視察。現場でどのようなコミュニケーションや対応が、子供の想像力を育むことにつながるかを実践的に学ぶことができます。  (3)振り返り共有会: 2026年2月21日 講座期間を通じて得た学びや気づきを他の参加者と共有し、今後の実践活動に活かすための振り返りを行います。自らの振り返りだけでなく、他者の視点を取り入れることで、自身の強みや今後の課題を客観的に捉える機会となります。
--------	--

# 3 カリキュラム

## (1) 基礎講座 概要

さまざまな場で子供向け事業に関わる講師陣からの、子供の芸術文化体験の意義や実践例等によって、事業をコーディネートするための基礎的な知識と考え方を座学形式で学びました。

### 第1回 なぜ子供に芸術文化体験が必要なのか？

堤 康彦 NPO 法人 芸術家と子どもたち 代表

2025.9.27(土) 14:00~16:30 アーツカウンシル東京 会議室

コーディネーターとして子供に向けた事業を企画、実現に導く上で根幹となる子供自身にとっての芸術文化体験の意義や重要性を理解する。

### 第2回 子供の成長と芸術文化体験がもたらすもの

鉄矢 悦朗 東京学芸大学 教授・デザイン研究室

2025.10.4(土) 14:00~16:30 東京文化会館 会議室

子供の感情過程を知ることにより、芸術文化体験から子供の成長へとつなげるための場のづくり方や接し方を考える。

### 第3回 国内外の子供向けプログラムの実例を探る

白木 栄世 森美術館ラーニング・キュレーター

2025.10.11(土) 14:00~16:30 アーツカウンシル東京 会議室

国内外のさまざまな子供向けワークショップや、アートプロジェクトの事例を通して、幅広い取組の知見を得る。

### 第4回 施設側の視点で企画から実施のプロセスを学ぶ

梶 奈生子 東京文化会館 事業企画課長

2025.10.17(金) 18:00~20:30 アーツカウンシル東京 会議室

企画の実現に向けた実践的なスキルとして、「施設としての観点」を理解し、課題や施設の特徴にフォーカスした企画立案に取り組む。

### 第5回 アーティストと共創する上での視点を学ぶ

臼井 隆志 ファシリテーター/アートエデュケーター

2025.10.24(金) 18:00~20:30 東京文化会館 会議室

コーディネーターがアーティストや子供、施設の職員との間に立ち、橋渡し役として企画をまとめ上げるのに必要な視点を学ぶ。

### 第6回 場の特性を捉え、プログラムを構築する

大巻 伸嗣 美術作家

2025.11.7(金) 18:00~20:30 アーツカウンシル東京 会議室

多様な地域でプログラムを展開するアーティストの視点を学び、アーティストとステークホルダーとの共創のプロセスを理解する。



### 第1回 基礎講座

## なぜ子供に芸術文化体験が必要なのか？

～アーティスト・ワークショップを通じて社会課題と向き合う～

堤 康彦氏 NPO 法人 芸術家と子どもたち 代表

大学卒業後、10年間民間企業に勤務。退社後、大阪府立大型児童館等を経て、99年より独立。現代芸術家を小学校等へ派遣しワークショップ型授業を実践する活動「ASIAS(エイジアス)」をスタート。2001年NPO法人化。03年「アサヒビール芸術賞」受賞。04～16年、東京都豊島区の廃校を拠点にした地域向けアートプロジェクトを実践。08年、学校やホール等でワークショップを通じて子供が主役の舞台作品を創作する活動「パフォーマンスキッズ・トーキョー」を開始。11年、児童養護施設での活動開始。23年、「令和5年度文化庁長官表彰」受賞。学校教育や児童福祉等の分野で子供と芸術家をつなぐ事業を展開する。著書に、「子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践」(共著/佐藤学・今井康雄編)、「子どもたちのコミュニケーションを育てる」(共著/秋田喜代美編)他。

第1回は「なぜ子供に芸術文化体験が必要なのか？」がテーマ。社会課題と向き合い、コーディネーターとして子供向け事業を企画・実現していくために、子供にとっての芸術文化体験の意義や重要性を学びました。

「NPO法人 芸術家と子どもたち」代表の堤康彦さんを講師にお迎えし、社会課題と向き合う取組、子供を取り巻く社会状況とアーティスト・ワークショップの効用、子供向け芸術文化体験コーディネーターに必要な資質の3点について講義をしていただきました。

### 社会課題と向き合う取組

まず、コーディネーターとして子供の芸術文化体験を企画する目的について整理しました。子供を取り巻く環境におけるさまざまな社会課題を解決することを目的に、芸術文化を用いた「社会課題解決型」の取組について、ご自身の実践を踏まえながら、プログラムづくりで重視している点などをお話されました。

1999年から活動を開始した子供ワークショップの専門コーディネーター団体である「芸術家と子どもたち」の活動の柱の一つがPKT(パフォーマンスキッズ・トーキョー)です。学校やホールにて、ダンス・音楽・美術・演劇の分野のアーティストが参画し、現代アーティストと子供が出会う”場”



くり”を行っています。その際に大切にしているのは、「子供にとってもアーティストにとっても良い場になること」と堤さんは言います。そのため、学校や子供がいる施設では、アーティストも交えて、コーディネーターは事前・事後のヒアリングを必ず行い、関係者とのやり取りでは、期待を少し超えるような、一歩先を見据えたプログラムづくりを心掛けていくとのこと。さらに実施後には、振り返りを行い、次回の改善につなげていくという実践のプロセスが紹介されました。

また、活動を行っていく中で、あらゆる環境の子供に届けたいという思いから、児童福祉、矯正教育・医療・地域の現場へと活動の幅を展開し、さらに施設間の交流へも発展したとのお話がありました。さまざま施設や子供たちと関わりながら、アーティスト・ワークショップのあり方を勉強・模索したと言います。こうした実践を通して、アーティスト・ワークショップが、現代の子供たちの自立支援や自己肯定感の向上のペースになるという実感を果たすそうです。

受講生からは、「子供の芸術体験について、『社会課題解決型』について漠然と考えていたので、堤先生のお話は大変貴重でした」といった声がありました。

## ■子供を取り巻く社会状況と アーティスト・ワークショップの効用

ここでは、社会の変化や子供を取り巻く環境の変化によって一人ひとりの子供に寄り添うことの必要性が増大しているという指摘がありました。

アーティストが関わることで子供たちにどのような影響が生じるのか。堤さんは、アーティストとは「人の表現や感じ方はそれぞれ異なり多様である」という前提に立つ存在だと指摘します。アーティストが子供たちのアイデアや表現、感受性などを生かすことで、自己肯定感の向上や、他者との関係づくりの質の向上、協働の喜びにつながる可能性があると言います。また、アーティストとのワークショップ

では、自由な表現が許される、否定されることがない、そして定期的に用意される「自分の居場所」であると感じられることが重要であり、そうした場を切実に必要としている子供たちこそ届けたいという思いを述べられました。さらに、芸術体験は単なる文化体験ではなく、現場や子供一人ひとりに応じた回復や成長の機会となり得ることをお話しいただきました。

「芸術が単なる表現活動にとどまらず、心を閉ざした子供や障がいを持つ子供たちとの大切なコミュニケーションツールとして活用されていることを実感した」という受講生の声がありました。

## ■子供向け芸術文化体験コーディネーターに 必要な資質とは？

まずは、コーディネーターは、アートの専門性を持つと同時に、物事を俯瞰して捉える視点が必要だと話されました。社会や子供を取り巻く環境を広く見渡すためには、関係する人を知ろうとする姿勢、福祉や教育など他分野への関心を持つこと、そして子供の内面の動きを想像し、表面的な反応のみで判断しないことが重要だと示唆されました。さらに、行政的枠組みにとらわれない柔軟な発想を持ち、多様性の理解や価値創造を促す存在であること、心のセーフティネットの役割を意識することの大切さについても示されました。

## ■最後に

講義の中でたびたび触れていましたが、受講生に対して、「試行錯誤を重ねること」「挑戦し続けること」の大切さについて、改めてお話されました。子供の芸術文化体験は、社会に必要とされていることであり、社会や子供を取り巻く環境の変化に応じるためにも、特に、この2点が重要であると締めくくりました。



## ■質疑応答

1時間の講義が終わり、質疑応答を行いました。受講生からは積極的に質問が挙がり、堤さんが丁寧に回答するなど、活発な議論が行われました。

Q. 不登校の子供へのイベントで「面白くない」「もうやらない」など参加に前向きではない子供たちを相手にしているのですが、どのような気持ちで向き合うと良いのでしょうか？

A. ワークショップは「ライブ」であり、その空間で起きていることをどう受け止めるかだと考えています。こちらから排除することはせず、アーティストは子供の気持ちが変わるのを「待つ」場合が多く、コーディネーターは、その子がその空間から出ていかに促しながら、「本当の気持ち」を押しはかり、次回に向けて対応できることをみんなで考えるようにしています。

Q. 2~3時間の短い時間のワークショップやイベントではなく、PKTのように長い時間をかけて子供たちと向き合う意義を教えてください

A. 課題を抱える子供や、自分の表現を出すのに時間がかかる子供など、さまざまな子供と一緒に活動するためには、短時間で信頼関係を築くことは難しく、特に福祉系の施設を訪れる場合は、時間をかけるケースが多いです。一方で、時間をかける場合には活動の資金集めも重要です。プロであるアーティストに対しては相応の費用を支払うべきだと考えています。

Q. 学校などで1日だけのワークショップを開催することが多く子供たちと一期一会の交流になってしまうなかで、1日だけの場合、何に目的や主眼を置くと良いのでしょうか？

A. 単発のワークショップでも、普段とは違う子供同士の関係性が生まれ、表現することに興味を持つようになる子がいたり、1人でも2人でも、その体験をきっかけに何かしらの変化が起きれば良い、という考え方で取り組んでいます。

Q. 社会的意義は伝わりやすいものの資金集めに社内でも苦労しています。子供向けの事業を展開する企業では、どのような目的や考えで出資しているのか教えてください。

A. 時代によっても企業ごとでも異なり、社員の社会貢献活動の一環であったり、例えば不動産価値を上げるという目的であったり、企業の本業に近いところで社会にどう貢献できるかという視点で、その企業の大切にしていることをよく調べるのが重要です。

Q. 地域のアーティストを招き、ワークショップを展覧会に合わせて開催することがあるのですが、アーティストとのやりとりで大切にしていることや気をつけていることを教えてください。

A. アーティストとコーディネーターは双方を評価し合うフラットな関係だと捉え、ワークショップの質を担保するためには、その内容にとって最も適したアーティストを探すことが重要です。「子供にとって何が一番良いか」という視点を軸に、アーティストを選定しています。

Q. 美術に関する事例があれば教えてください。また、2歳児など低年齢の児童に対して双方向の関係性をどのようにつくられていますか？

A. 身体をつかったダイナミックな造形活動が多く、子供自身が「作りたい」と思える動機づけや、みんなでやるからこそできるものを意識しています。小さい子供には、光と影のように五感にうったえる活動や素材を工夫するなど、段取りを大人が決めるのではなく、小さい子供なりに感覚で動けるような活動を取り入れています。





## 第2回 基礎講座

# 子供の成長と 芸術文化体験がもたらすもの

鉄矢 悦朗氏 東京学芸大学 教授・デザイン研究室

鉄矢悦朗建築事務所から2002年東京学芸大学へ転じ、現在に至る。モノづくり、コトづくり、バづくりをキーワードに、立体・空間デザイン/デザイン教育/ものづくり教育の研究と実践を行っている。2005年学内で発足したことも未来プロジェクトで生まれた「あそびは最高の学び」というフレーズに出会い、さらに面白く教育・研究活動を深めることになった。空間、遊具、ワークショップ等のデザインに加え、最近は「共育のまちづくり」と称し地域のデザインに取り組んでいる。東京学芸大学 教授、NPO法人 東京学芸大ことも未来研究所副理事長。

第2回は「子供の成長と芸術文化体験がもたらすもの」がテーマ。芸術文化体験を子供の成長へとつなげるため、子供の好奇心や創造性を高める視点とヒントを学びました。

東京学芸大学の教授であり、「建築家」「教育者」「あそびの研究者」「デザイナー」といった多面的な実践と独自の観点をもつ鉄矢悦朗さんを講師にお迎えし、子供の体験を増やすための「大切なキーワード」についてのレクチャーと、子供への芸術文化体験のアイデアを共有するワークショップを行いました。

### ■面白いとは何か

「おもしろい」という言葉はなぜ漢字で「面白い」と書くのか?という問いが投げかけられました。受講生たちは突然の質問に頭を抱えながらもワークシートに記入し、グループでお互いの考えを読み合いました。

鉄矢さんは、大阪教育大学の島崎英夫さんの説を引用して、真っ暗な洞窟で出口を見つけた瞬間、顔に光が当たる様子、つまり希望や未来を感じたときに面白いと感じるのだと説明しました。何か上達や成果につながりそうな希望が

見ると、面白いと感じるようになると分析。そして、自分が面白いと感じたときに、なぜ面白いと感じたかを自身に問うことで、子供のモチベーションを高める効果的なアプローチのヒントになることが示されました。

続けて、面白いということは解像度を上げることと分析しました。鉄矢さんが学生たちとステンドグラス美術館に行った際、ステンドグラスの面白さを嬉しそうに解説する学芸員の話に、学生たちが夢中になっていく姿を目の当たりにしたエピソードを、実際の学生たちの写真とともに紹介しました。わからなかったことがわかる、知らなかったことを知る・つながる、こうしたきっかけを与えるために、まずは自分自身が面白いがることで、面白さがまわりに伝わっていくと解説しました。

受講生からは、普段何気なく使っている「面白い」という言葉を改めて捉えなおし、目から鱗が落ちるようだったという声が聞かれました。



### ■「いいこと考えちゃった!」はなぜ起こるか

2つ目のテーマは、ワクワクする発想やアイデアがどのようにして生まれるか。ワークシートに受講生が自分の「いいこと考えちゃった!」という体験を振り返り書き出しました。

鉄矢さんは「これまでの体験や知識が今にうまく使えるときに、いいこと考えちゃった!は生まれます」と解説しました。一度も見たことも体験したこともないものから発想は生まれないことから、いろいろな経験をさせることがすごく大事とのこと。色の体験を例に挙げると、色の違いやいろいろな色があることを知っていれば、絵を描くときに「もうちょっと違う色ができるはずだ」と発想へ結びつくことにつながります。子供への事業を企画する際に、上手くいかどうかではなく、子供のパレットの中に新しい色を入れることなのだという視点を持つこと、そして体験が増えるといろいろなもの解像度も上がっていくと、体験の意義を強調しました。

### ■子供の体験を増やすための “大切なキーワード”

「面白い」「解像度」に加えて「好奇心」と「行動力」をとっておきのキーワードとして鉄矢さんは挙げました。

「好奇心」の“奇”は何か?東京藝術大学の有賀誠門さんから聞いたという話から、「奇数」の奇で、「割り切れないものを好む心だ」という説を紹介しました。白黒割り切れずに、いつまでも抱えているからこそ、あるときに抱えているものが結びついて新しいアイデアが生まれると言います。

そしてもう一つ大切なのが、好奇心を次の一歩へ進める「行動力」。大人がその一歩をサポートできるか。サポートするときに、手を触れて支えるのではなく、2センチ離れた触らない距離で、本人が自分一人の実力でやり切ったように感じさせることが重要であると説きました。「ぜひ行動力のある子供を後ろから静かに見守ってあげてください」と前半のレクチャーを締めくくりました。



## ■ワークショップ

①「こんなことできないかなあ」妄想だって数打ちゃなんとかなる（かもしれない）

② 解像度が上がって面白かったエピソード

後半は2つのテーマについてアイデアや経験を共有するワークショップを行いました。1つ目のテーマは、本講座を受講するメンバーがどのような考えや課題意識を持っているのか、お互いを知る初めての機会となりました。2つ目のテーマは、子供が新しいジャンルに出会い解像度を高めていく過程を念頭に置き、自分の体験をもとに話し合いました。グループ内で共有した後、各代表者が1つのテーブルに集まり、それを取り囲むような形で全体共有の時間が設けられました。

Bグループから、「ちょこっと」でも体験する機会をつくりたいと思う一方で、中高生は消極的でなかなか参加してもらえないという話題が上がると、鉄矢さんから、スタッフの学生がサッカーの腕前を披露したことをきっかけに、ヤンチャな中学生が急に積極的になったというエピソードや、受講生からも、継続的にかかわる中で参加してみようと気持ちが変わったという体験が共有されました。

Eグループは、築90年の小学校で働く先生から出た「あと5年で学校がなくなってしまうので何とかして残したい」と

いう思いと、演劇シアターで働く方から出た「文化財で演劇ができないか」というアイデアが結びついて、その古い小学校で演劇ができないかという話になったとのこと。鉄矢さんも思わず「おー！いい！！」と感嘆の声を上げていました。

Fグループからは、学校では単発的には文化体験の機会が設けられているが、年間を通して子供が芸術に触れられる機会を地域も交えてつくってほしいという意見が出ました。これに関連して、鉄矢さんは、「ホールや美術館が学童や放課後子供教室をやったらいと思っていて、興味を持った子供がずっと通って専門的なことに触れられる、そんな取組ができると面白いのではないかと述べられ、多くの受講生がなるほどと頷きながら耳を傾けていました。

本講座では初めてのグループワークでしたが、自分とは異なる専門性や職種、立場の方たちの考えや経験に触れることができたことが、受講生にとって大きな刺激になったようでした。



## ■最後に

鉄矢さんが今気になっていることについて2点明かしました。

1つ目は学校にできている放課後子供教室について、朝から18時ころまで子供がずっと同じ敷地で過ごす状態はおかしいのではないか、という問題提起をされ、多様な放課後子供教室のあり方について「皆さんのところで演劇をずっとサポートしているとか、照明ずっとやっているとか、写真を撮っているとか、そういうのって良いと思うんですね」と改めて受講生に投げかけました。

2つ目は、働き方改革が進んで大人が早く帰れるようになっているはずなのに、大人が子供と触れ合う時間が全然増えていないということ。

鉄矢さんは、「割り切れないことを見えないふりするのではなく、解決するかはわからないけど、割り切れない方にみんなで行って、面白がらしましょう」と締めくくりました。





photo: 御厨慎一郎

## 第3回 基礎講座 国内外の子供向けプログラムの 実例を探る

～アートがもたらす対話で新たな自分に出会う～

白木 栄世氏 森美術館ラーニング・キュレーター

2006年武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程修了。2003年より森美術館勤務。展示会に関連するシンポジウム、アーティストトーク、ワークショップなどのラーニング・プログラムの企画・運営を担当。あらゆる人が「その人らしいまま」で鑑賞できる場づくりを重視し、ファミリープログラム、スクールプログラム、アクセスプログラムなど、多様なプログラムを行う。その活動は、美術館を誰もが利用できる開かれた学びの場として機能させることを目指している。

第3回は「国内外の子供向けプログラムの実例を探る」と題して、国内外のさまざまな子供向けワークショップや、アート・プロジェクトの事例を通して、幅広い取組の知見を得ることをめざしました。森美術館で子供向けプログラムも多数企画・実施していることに加えて、海外のプログラムの事例にも詳しいラーニング・キュレーターの白木栄世さんにご登壇いただきました。

白木さんには2つのワークショップと、国内外のさまざまなプログラムの事例をご紹介いただきました。

### ■“同じものを見る”ミニ・ワークショップ

講座のはじめに、白木さんからそれぞれの関心や知識・経験を共有しあい、双方向に学びあう「ラーニング」という考え方が示されました。そしてこの講座では、美術館での実践を通してこれからの時代に「子供たちが育むべき力」を考えることをねらいとしました。

アイスブレイクでは、画像をもとにミニ・ワークショップを行いました。見たままを言葉にし、形容詞を加え、さらに背景や物語を想像していきます。受講生は画像の中のオブ

ジェが一体何なのか、付箋に書き出し、隣の受講生と共有しました。同じものを見ていても、感じ方や解釈が異なること、そして「見ること」が対話を生み出すことを体感できる時間となりました。「作品を見るとはどのようなことなのか」、「子供と共有するとはどのようなことか」そんな問いを持ちながら講座が始まりました。



### ■現代アートの、見えていない背景を想像する

白木さんが、森美術館のラーニング・プログラムで重視しているのは「体験」と「ストーリー」だと述べます。来館者のそれぞれの体験や、その背景にある物語を想像することこそが、現代アートに向き合う上で大事にするべきことではないかと投げかけました。

会場風景の画像とともに紹介された2014年の「リー・ミンウェイとその関係」展では、参加型アートを通して人と人がつながることや、美術館という場の意味を問う体験が紹介されました。

また、「森美術館開館20周年記念展 ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」では、都市のアクセシビリティや社会背景を扱う作品を例に、スクールプログラムに参加した児童・生徒たちが一見しただけでは見えてこない作品の背景について、どのように情報を得て、自分の見方として紡いでいくかを体験したエピソードが紹介されました。

「森美術館開館20周年記念展 私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために」展のアサド・ラザ《木漏れ日》は、作家が館内をリサーチして発見した、壊れていた天窓を改修するという行為そのものを作品として見せるものでした。アサド・ラザは両親が医者で家庭に育ち、子供の頃からアーティストになったら自分も人に何かケアをすること、アートというものに力があるのではと考えていたことが明かされました。

このように、作品の背後にある見えない背景を想像しながら鑑賞してもらうような作品が多く展示されていることが、森美術館で紹介している現代アートの特徴だと解説しました。

### ■森美術館ラーニング・プログラムの現場から

美術館でのラーニングとは何か。白木さんは、五感を使った体験を通して「日常生活の中で起きていることと比較ができる体験を促すこと」を大事にしていると語りました。その中で、双方向の学びが起きることが、森美術館で大切にしているラーニングの根幹だとしました。「誰にでも文化を享受する権利がある」ことを念頭に、家庭でも学校でもない、第三の学びの場、新しい学びの場になれるのかということを考えてプログラムをつくっていると語ります。

森美術館で行われているさまざまなプログラムのカテゴリが展開され、作品を鑑賞する前後でどのようなプログラムが有効なのか、という視点の取組についても紹介されました。

スクールプログラムでは、生徒・児童にとって美術館に来ることは日常から大きくかけ離れた経験であり、学校ではない場所で、子供たちがもうちょっとリラックスできるような場面をつくることができなかと考えているそうです。

また、作品鑑賞は、日常の経験を手掛かりにできるという考え方が紹介されました。視覚的な驚きや、美しさ、違和感といった感情、さらには作家の背景や社会的な背景を知ること、自分の価値観との比較が生まれます。こうした「自身の経験を持ち寄り鑑賞」こそが、現代アートを鑑賞するときに起きる、大事にすべきこととして共有したいと語られました。

受講生からは、「子供向けだから、そうではないから、と区切ることで、自由に会える権利を奪っていたのではないか」との気づきも共有されました。

### ■子供たちの声から

森美術館のラーニング・プログラムの参加者インタビューの動画は、森美術館YouTubeチャンネルに掲載されています。子供たちの声に続き、港区立の中学校3校で行われた、アーティストのオスカー・ムリーヨのアート・プロジェクトの事例についても、動画とともに紹介されました。数カ月間、学校の机にキャンバスを張り、自由に絵を描いたり落書きしたり、子供たちにとってキャンバスが学校生活の一部となり痕跡を残します。これまでに30カ国以上で実施されてきましたが、港区の子供たちの作品はヴェネチア・ビエンナーレにも展示されました。



また、港区の公立中学校との授業づくりでは、21\_21 DESIGN SIGHTや国立新美術館、サントリー美術館といった六本木の美術館を活用したい中学校の思いに回答して実施されました。3年生が森美術館の学芸員と授業をつくる体験を行うなど連携の様子が紹介されました。

受講生からは「私自身が子供と関わる活動では、活動後の姿に触れる経験は少なく、目の前の時間をどう過ごしてもらうかということに精一杯になっていた」という気づきが寄せられました。

## ■海外美術館(英国2014年~2016年)の リサーチから

森美術館が「ラーニング」という言葉を掲げる背景には、「誰もが芸術を鑑賞する権利がある」というイギリスのテート・モダンの実践思想があります。白木さんは、ロンドン五輪後の財政難の中で、美術館が多様な人々にとって開かれた「学びの場」としてどう機能していけるかを再考していた当時の状況を紹介しました。

またラーニングの部署を、展覧会チームと同等の位置づけに置く体制を整えており、地域の調査を行うリサーチセンターと連携して、コミュニティに寄り添ったプログラムを企画・評価することも担っていたことが紹介されました。

新館にはラーニング・プログラム専用のフロアに「Tate Exchange」という名称で、若者がアーティストと場をつくる活動や、病院やカフェと協働した「How are you?」を合言葉にしたプログラムなど、年齢やバックグラウンドも関係なく参加できるプログラムが行われていました。これらは、美術館は誰にとっての場所なのかを問い直す実践でもありました。

また、マンチェスターのウィットワースアートギャラリーでは、ガーデンキーパーが企画に参加したり、スタッフがバーに作品を持ち込んで対話を生むなど、多様なプログラムを実施している事例も紹介されました。さらに、親子向けのプログラムの参加者が、美術館でのプログラム後のエピソードを共有できるプラットフォームの運営を通じて来館者同士が支え合う工夫も見られる例も紹介されました。

こうしたAge-friendlyな取組は、世代や背景を超えて“学びの場”を開くことが未来の観客を育てるという視点につながる、という提示で締めくくりました。

## ■子供たちの日常を想像する

森美術館と英国の美術館の実例を踏まえ、最後に一つの作品を用いて鑑賞ワークショップを行いました。受講生は最初のミニ・ワークショップと同様に、見たものを言葉にし、形容詞を加え、さらに背景や物語を想像して付箋に記します。続いて、隣の人と共有します。ここでは森美術館の収蔵作品の、松川朋奈《でもこれでようやく、私らしくいられるのかな》の画像が投影されました。作家自身が六本木でリサーチし、偶然知り合った女性の話を聞き取りするなかで、その人らしい風景を写真で撮影したり相手の様子を見て、油絵で描いた作品です。現代アートの作品を鑑賞して、背景を想像することを通して、作家の社会的・歴史的な価値すらも問われるような作品を、ラーニングの手法によって他者と対話しながら共有できることが示されました。



## ■最後に

白木さんは、今後担い手として活動する受講生たちに向けて、「子供だけでなく、その子供を取り巻く日常の話し相手が誰なのか、その人たちは普段から美術館に足を運ぶのか、そうではないのか。その背景を想像しながらプログラムを行うことを共有したい」と伝えました。美術館に行くことは特別な出来事ではなく、人々の日常の延長線上にある存在であるべきだという考えが示され、これを踏まえて学びをつくっていくことが全体の結びとなりました。



<sup>1</sup> <https://www.mori.art.museum/jp/collection/2729/index.html>



#### 第4回 基礎講座

### 施設側の視点で 企画から実施のプロセスを学ぶ

梶 奈生子氏 東京文化会館 事業企画課長

2012年度に東京文化会館ならではの子ども参加事業として「オペラをつくろう！」を立ち上げ、子供たちが「得意なこと」でオペラに参加する取組を開始。2013年度から「あらゆる人々に集い親しまれる劇場」を目指して0歳から参加できる音楽ワークショップと、その担い手の育成をポルトガルのカーザ・ダ・ムジカと連携して実施している。0歳からのさまざまな世代、障害があってもなくても日本語が苦手でも、誰でも参加できるさまざまなワークショップを提供中。館内だけでなく、都内文化施設や教育機関、福祉機関等とも連携して、あらゆる人達の生きがいや豊かな心の醸成につながる事業を展開している。

第4回は「施設側の視点で企画から実施のプロセスを学ぶ」がテーマ。企画の実現に向けたより実践的な視点やプロセスを理解するため、施設の課題や特徴にフォーカスした企画の立て方を学びました。

東京文化会館の事業企画課長であり、子供だけでなくあらゆる方を対象とした事業の立ち上げに携わってきた梶奈生子さんを講師にお迎えし、前半は公立の文化施設として、どのような視点で事業を組み立てているのかについて講義をしていただきました。後半は実際に企画書を作成するワークに取り組みました。

#### ■東京文化会館の特徴と課題は何か

まず梶さんは、東京文化会館の事業の背景を整理しました。

建築家、前川國男が設計した東京文化会館は、1961年に開館した当初から海外の一流劇場のオペラやバレエの公演が上演され、「音楽の殿堂」と言われています。プロモーターが海外の一流の劇場を招聘して、大ホールを借りて上演する



ような貸館としての公演が非常に多く、大ホール・小ホールともに高い稼働率を誇ります。地方の劇場だと、施設側が公演を買って地域の人たちに提供するケースが多く、貸館によってクオリティの高い公演を提供できるのは東京文化会館ならではの特徵とのこと。

一方で、チケットが高額になることや、集客が必須であるため人気の定番作品が上演されることが多いこと、富裕層やコアなファン、高齢層が多く、観客が固定化する傾向にあることを挙げ、新たな観客を獲得する機会や子供向けの公演がほとんどなく、一般の人にとっては敷居が高い、近寄りやすい存在になってしまうことを貸館の課題として挙げました。

#### ■公立文化施設としての事業実施の考え方

貸館公演に対して、東京文化会館の自主事業はどのような取組を行っているのでしょうか。

2012年にいわゆる劇場法という「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が施行され、いろいろな人が来て楽しめる場所にならなければいけないという方針が示されたことが、自主事業の背景として説明されました。

東京文化会館の設置者である東京都と、管理運営を行う東京都歴史文化財団のそれぞれの方針に基づき、「創造発信」「人材育成」「教育普及・社会共生」の3つの事業の方向性を次のように示しました。

- ・貸館では実現しにくいような作品を取り上げること
  - ・できるだけ廉価で参加しやすくすること
  - ・若手を起用して活躍の機会を提供すること
  - ・ファミリー層や次世代の担い手、障害の有無にかかわらずあらゆる人が参加できるようなものを実施すること
- 入場料については、価格を下げることで民間を圧迫することにならないように、バランスを考えながら実施するように気をつけているとのことでした。

また、事業の特徴として、人材育成の「東京音楽コンクール」や「ワークショップ・リーダー育成プログラム」で発掘した人材を活用して、地域の文化施設と連携した無料コンサートや、学校へのアウトリーチといった教育普及・社会共生事業を積極的に行っていることを強調しました。

#### ■子供の参加型事業における企画のプロセス

具体的な事業として「オペラをつくろう！」と「東京文化会館ミュージック・ワークショップ」の2つプログラムを紹介しました。

課題であった新たな観客の創出や、劇場法施行、東京オリ

ンピックの招致に向けた文化芸術活動の機運醸成などを背景として、職員がアイデアを出し合って子供の参加型事業を新たに立ち上げたそうです。

企画にあたっては、誰でも参加できる取組を実施することに加え、「注目度が高くても、その場限りになるのではなく、館に定着していくものをつくっていききたい」「自分たちの館だけではなく、近隣や地域の施設と連携し、都内全域に根付いていくもの、できれば全国に波及していくものをつくっていききたい」という指針があったことを紹介しました。

「オペラをつくろう！」は「登場人物になる／オペラに登場するものづくり／舞台を学ぶ」の3つのプログラムがあり、東京文化会館らしい舞台芸術を子供に向けた取組にしたいということで企画したもの。子供がプロと同じ舞台に立つ体験や、制作スタッフとの協働を通じて、舞台作品への興味関心につながったり、一つのチームとして活動していくことで、協調性やコミュニケーション力が高まったり、多様性を学ぶ機会にもなっています。

次に、0歳から参加できる「東京文化会館ミュージック・ワークショップ」は、育成したワークショップ・リーダーがストーリー性のあるようなプログラムをつくり、繰り返し実施しながらスキルアップにつなげています。



立ち上げにあたっては、「10年・20年先を見据えて、音楽をツールにしたワークショップの担い手を育成して、その活動の拠点となるとともに、あらゆる人たちが集い生きがいを感じられる拠点になっていきたい」という思いで開始したことが明かされました。当初は子供を中心に展開していましたが、高齢者や障害のある方などあらゆる人へと拡大していきました。

梶さんは、劇場に行くことが当たり前になるには、小さいときから機会を持つこと、そしてその子が大きくなった10年・20年先に、劇場に気軽に足を運べるような環境が整って

くと語りました。また、これまでやってきた成果として、ワークショップへの参加をきっかけに不登校が改善されたり、特別支援学級での実施では、正解/不正解ではない、その人の魅力を最大限に発揮できる機会になっていたりと、実際に手ごたえを感じられたエピソードも紹介しました。

## ■企画を立てる際のポイント

前半のレクチャーのまとめとして、東京文化会館において企画を立てる際に気をつけている視点を3つ挙げました。

### ・企画の意義⇒実現に向けたアピール

企画実現に欠かせない予算を獲得するためにも、最もアピールすべきが企画の意義であり、事業を実施するミッションを明確にすることが重要と説明しました。

### ・施設にとって魅力的な企画か

次に、地域や施設の課題とマッチしているか。そしてどこかに大きな負担がかからないように、持っているノウハウとのバランスや、一緒に事業を実施するお互いにとって有益であることを意識していると述べました。

### ・訴求力のある企画か

最後に、成果や意義が広く伝わりみんなが必要性を感じられること。届けたい相手にどのようにして届けるのかも重要であると説明しました。

社会的に子供の参加型事業のニーズが高まっている一方で、地域の文化施設ではノウハウがあっても人が足りていなかったり、経験値が少なかったり、自ら取り組むことが難しい状況があると言います。そうした中で、コーディネーターに必要なこととして、「自分の企画を施設側にどのようにアプローチして一緒に取り組んでいけるか」を考えてほしいとレクチャーを締めくくりました。



## ■ワークショップ： 施設の特性や課題からの企画立案

後半は、事業の意義を第三者へアピールするという視点で企画を立てるため、企画書の作成に取り組みました。受講生は、自分が現在所属している文化施設や学校、もしくは任意の施設を想定し、施設の特性・課題／企画内容／対象年齢／ねらい／期待される効果／概算予算の項目に従って子供向け事業を企画しました。

各自で企画書を書いた後、グループで意見交換を行い、企画をブラッシュアップしていきました。その後グループごとにどのような企画や話題が出たかを発表し、梶さんからフィードバックをいただくという流れでワークを行いました。

発表の中で、いくつかのグループから、「地域とのつながり」というキーワードや、そのきっかけとなるような企画案が出ました。梶さんは、これからの超高齢化社会において、地域の子供と大人がつながることがより一層注目されると言及しました。

また、子供と世代の近い学生と事業を行うことで親しみやすさにつながることや、一方でアーティストなどのプロフェッショナルなアイデアを取り入れることで、自分たちでは思いつかないような企画が生まれることなど、誰と事業を実施するかという視点の重要性を示しました。

さらに、アーティストに活動の場を提供することが必要である一方で、資金や場所、人材など課題も多いことについて、梶さんは、子供と一緒に活動する機会をつくることで、子供にとってもアーティストにとってもいい影響があるような取組が必要であるとししました。

受講生の多様な企画から話題は広がり、より実践的な視点を学ぶことができました。受講生からも、それぞれの地域やコミュニティが抱えている課題をみんなで共有できたことや、自分の企画をより具体化することができて学びにつながったという声が聞かれました。



## ■最後に

受講生からかなり幅広い企画のアイデアが出たことで、梶さん自身も学ぶことが多かったと述べられました。

梶さんは、「子供たちがすくすくと育っていくような環境を整えていくのは、私たちの世代」と改めて子供へ体験の機会を提供し続けることの必要性を強調し、文化施設や文化財団、教育機関、企業、フリーランスなどさまざまなバックグラウンドを持つ受講生たちに、「これから先、自分たちのフィールドでさらに深めていっていただけるといいなと思っています」と今後への期待を伝え締めくくりました。





## 第5回 基礎講座

# アーティストと 共創する上での視点を学ぶ

～アーティスト、子供、コーディネーターが「同じモノを見る」～

白井 隆志氏 ファシリテーター/アートエデュケーター

学生時代から現代美術家や劇作家らと協同し、幼児から中高生、大人までが関わるアートプロジェクトのプロデュース、ファシリテーションを担ってきた。その後、大企業の教育系新規事業開発と学びのためのファシリテーター人材育成を兼務し、のちにMIMIGURIに参画。MIMIGURIでは主に組織文化開発や人材育成の教材開発を担当している。

第5回は「アーティストと共創する上での視点を学ぶ」がテーマ。コーディネーターがアーティストや子供、施設の職員との間に立ち、橋渡し役として企画をまとめ上げるのに必要な視点を学びました。

ファシリテーター・アートエデュケーターとして、学生時代から現代美術家や劇作家らと協同し、幼児から中高生、大人までが関わるアートプロジェクトのプロデュース、ファシリテーションを担ってきた白井隆志さんを講師にお迎えし、「同じモノをみる」をテーマにフレームワークを作成するワークショップなどを行いました。

## ■今日の目的 / グランドルールの共有

まず、白井さんから講座の目的について説明がありました。子供、アーティスト、場の文脈、そして受講生自身の文脈を重ね合わせたコンセプト図(4つの円から構成されるベン図)を作成すること。4つの円が重なる部分に、ワークショップや企画の核となる共通のテーマが浮かび上がってくるということです。その「重なり」を探りながら、受講生各自が大切にしたい視点や気づきを見つけてほしいと話されました。



子供がどんな経験、どんな時間を過ごしたのか、招聘するアーティストはどんな経歴で、子供や教育の場に対してどのような考えを持っているのか、施設がなぜ子供向けの企画を行おうとしているのか。そして、受講生自身の文脈がとても重要であり、つなぎ手である受講生自身が、どのような景色を見たくてこの場に参加したのかという動機のこと。この4つを重ねたところに、コンセプトが現れ、その重なりを手掛かりに、自分が何を大事にしているのかを発見する時間にしたというお話がありました。

また、グランドルールとして、受講生同士の年齢や経歴の差、例えばアーティストとの関わりや子供と関わる経験の差にとらわれず、異なる視点と相手の視点に立った文脈を、互いに尊重しあうことを大切にしたいと伝えられました。子供とアーティストが互いに学びあい、白井さんも含め、その場にいる大人も気づきがあるような、学びにあふれた社会をつくっていく担い手の一員として、こんな社会になったら面白いなというワクワクした気持ちを一緒に分かち合うような時間にしたと述べられました。

## ■チェックイン この講座に参加するに至ったセルフストーリー

次に、受講生自身が「自分は何を明らかにしたいのか」という問いを明確にするためのワークを実施しました。仕事といった文脈を背景に講座に参加していることをいったん脇に置き、個人としての動機や探究心に焦点を当てるのが目的です。

ワークでは、受講生一人ひとりが、現時点で思い浮かぶテーマや疑問をA4用紙に書き出しました。言語化された問いだけでなく、箇条書きやイメージ図など自由な形式で表現しました。また、白井さんの例として、「大人や子供が、自分の内側にあるイメージや考えを自然に表現できる場をどのようにしたら生み出せるのか」という探究テーマの紹介がありました。



その後、発言を伴わず、静かに受講生同士が紙を見せ合う時間を設け、言葉を介さない形でそれぞれの関心や問題意識を共有しました。受講生の抱く問いの多様性と深さが可視化され、今後の学びの出発点となることが確認されました。

白井さんは、今回書き出した問いが、アーティストと共創する際の重要な「アンカー(錨)」になると指摘。自分の問いの先をすでに探究しているアーティスト、研究者、デザイナー、建築家などを招くことで、子供たちと出会う場がより豊かで刺激的なものになる可能性があることを示しました。最後に、今回見出した自身の問いを大切に、今後の実践や学びの中で継続的に更新していくことが重要であると伝えられました。

受講生は施設や地域と、子供やアーティストに加えて、「自分=つなぎ手の問い」も重視する考え方に、大いに刺激を受けた様子で、共感の声も多数寄せられました。つなぎ手として自分自身がどんな世界を見てみたいのか、またどのようにつないでいきたいのかを考えて続けたいという意見も寄せられました。

## ■「アーティスト・イン・児童館」

次に、白井さん自身がこれまで取り組んできた、アーティストと子供が児童館で出会い、共同で創作するプロジェクトについて、経験や背景、企画の考え方が共有されました。児童館は、多様な年齢・背景を持つ子供が自由に出入りし、漫画やゲーム、工作、文化活動などを行う「第三の居場所」であり、学校や家庭に居づらい子供を受け止める福祉的役割も持ちつつ、「楽しい場」であることが最も重要であるという紹介がありました。

白井さんは、自身が10代のときにワークショップと出会った経験があり、「学校では出会えない大人」と出会える場をつくりたいとの思いから、大学時代に練馬区の児童館を拠点にしたNPOを設立。助成金や自治体の支援を得ながら、アートプロジェクトを継続的に展開してきました。児童館で活動する大人には、先生や保護者とは異なる“ラベル”があり、子供が大人をあだ名で呼ぶなど独自の関係性を築いており、この特性に着目し、アーティストという「正体のわからない大人」が児童館に入ったとき、子供がどんなラベルを貼るのか、どのように関係を築くのかに興味を持ったことが活動の起点であったと語られました。

活動事例として、服を使った作品づくりからファッションショーに発展したプロジェクト、劇団快快(FAIFAI)と子供たちによる演劇作品の再演、Nadegata Instant Partyと実施した架空の文化祭づくりと映画制作など、複数のアーティストと協同した取組が紹介されました。アーティストの創作方法

と子供の遊びや日常が交差し、虚構と現実が入り交じる独特の体験が生まれたと強く話されました。

これらの活動を通じて、「子供の文脈」「アーティストの文脈」「自分自身の問い」「施設の目的」という複数の文脈が重なり合う部分にプロジェクトを設計してきたということです。アーティストと子供と自分が「同じものと同じように見る瞬間」が生まれ、それが共創の核心になるとの考えが示されました。

また、子供とアーティストでは、同じ「演劇」や「作品づくり」という言葉でも前提となる記憶やイメージが異なるため、互いにどのように物事を見ているのかを丁寧に想像し、調整していくことが重要だと語られました。そのためには、児童館で一緒に遊ぶ、漫画を読むなど、日常的な時間を共有し、子供の“世界の見え方”を理解するプロセスが欠かせないと述べています。

活動の進め方としては、数カ月間のアートプロジェクト全体をワークショップデザインの考え方で構造化し、「イントロ→知る→創る→まとめ」という流れを長期の時間軸で組み立てていた点も共有されました。

最後に、白井さん自身が問い続けていたこととして、「施設の目的と自分の目的は重なっているか」「アーティストの創作ビジョンと自分がつくりたい場は一致しているか」「子供たちのワクワクと自分の願いは揃っているか」という3つの重なるの確認が挙げられました。これらの問いを軸に、多様な文脈が重なる場をどうつくるかを探求し続けてきたことが重要であると述べられました。

## ■ワークショップ： 同じモノを見る ～フレームワークの作成～

受講生が「子供」「アーティスト」「自分自身」「施設・場」という4つの文脈を重ね合わせるフレームワークを用いて、自身の企画や興味関心を整理するワークを行いました。まず、白紙に4つの円を自由に描き、思考を可視化します。形式に正解はなく、円の大きさや位置、図の形も自由とし、「思考実験」としてまず描いてみることを重視しました。

その後、受講生同士で内容を紹介し合い、描く過程での迷いや気づきを共有。聞き手には、子供やアーティストの立場で問いかけを行い、「どこがどう重なるのか」を互いに探求する姿勢が求められました。共有を踏まえて再度図を描き足したり、深掘りしたりする時間を設け、各自のフレームをより解像度高く磨いていきました。

白井さんからは、自身が劇団快快(FAIFAI)と行ったプロジェクトが再度紹介され、子供の文脈・児童館の文脈・アー

ティストの創作の視点・自身の動機がどのように重なり企画へと発展したかが語られました。特に、児童館に集まる多様な子供たちの背景、施設の目的、地域の大人との出会いの価値、自身の「大人観を揺さぶりたい」という動機など、文脈同士が交差することで創作の方向性が見えていく過程が示されました。後半は、受講生の事例共有が行われました。その1つとして、環境啓発施設における自然音の収集企画や、学校とアフリカンアート支援機構をつなぐ授業づくりなど、実際の文脈に基づいたフレームの読み解きが行われました。



白井さんから、テーマや興味をより明確に言語化し、それをアーティストと共有可能な「問い」に磨き上げることの重要性が指摘されました。企画者やアートマネージャーが自らの問いを深め続けることが、アーティストを触発し、より豊かな共創の土台となるという視点が共有されました。

## ■チェックアウト：振り返り

最後に、受講生は「今日得た新鮮な視点」および「自身の現場で試してみたいこと」の二点を振り返り、グループ内で共有する時間をもちました。

白井さんからは、言葉を磨き、自分だけの「マイワード」へと深めることで、テーマがより説得力を持ち、共創相手に伝わる問いとなることが強調されました。

受講生からは、4つの円のワークに対して、視覚的に捉えることができたことへの喜びの声や、人によって円の形や配置が異なり、それぞれの考え方や価値観の違いを感じたなどの驚きの声があがりました。このワークを用いることで周囲への説明がしやすくなる実感も得られたようです。





photo : Katsuhiko Ichikawa

## 第6回 基礎講座 場の特徴を捉え、 プログラムを構築する

大巻 伸嗣氏 美術作家

「存在」とは何かをテーマに制作活動を展開する。環境や他者といった外界と、記憶や意識などの内界、その境界である身体の関係性を探り、三者の間で揺れ動く、曖昧で捉えどころのない「存在」に迫るための身体的時空間の創出を試みる。近年の主な個展に、「Interface of Being 真空のゆらぎ」(国立新美術館/東京、2023)、「地平線のゆくえ」(弘前れんが倉庫美術館/青森、2023)など。2025年には、大館當代美術館(香港)にて、市民参加型の個展「Open the Box 2025: Bloom of Light」を開催。多様な背景を持つ人々が交錯することで形成されてきた文化と変わりゆく社会の中で、自身の生から大切なものを見つめ、形を作ること、時間や行為を共有して世界を構築していくことの可能性を問う。2008年の横浜トリエンナーレ以降、ボランティアや地域に関わる人々と一緒に作り上げる「Memorial Rebirth」も、足立区(2012~現在)や震災後の被災地、世界のさまざまな場所で展開してきた。

基礎講座の締めくくりとなる第6回は「場の特性を捉え、プログラムを構築する」がテーマ。講師は美術作家の大巻伸嗣さん。多様な地域でプログラムを展開するアーティストの視点を学び、アーティストとステークホルダーとの共創のプロセスを理解することをめざして、レクチャーとワークショップを行いました。

### ■ワークショップの原点

大巻さんが最初にワークショップを行ったのは2003年、静岡県立美術館で開催された「きらめく光ー日本とヨーロッパの点表現ー」展。自分の中に「芸術におけるサービスとは何か」という問いが生まれたとのこと。そして、人間の姿や関係を共有できるような場をつくれなにかという発想から、参加者が描いた作品をその人の視線の高さに合わせて配置しました。他者の視点の違いの重要性に気づききっかけであったことが語られました。



その後、介護福祉施設・社会福祉施設において年間6回のワークショップを約8年間継続。自身の身近に障害のある方がいたことから、福祉施設の現実やコミュニケーションの難しさを幼少期から感じており、その問題意識が活動の背景にあったのだそうです。

### ■ワークショップにおける6つのポイント

大巻さんは、マルセル・デュシャンの《3つの停止原理》を手がかりに、既存の定規に当てはめるのではなく、その人それぞれがもっている定規を考えていくことが、ワークショップにおいて重要であると語りました。同じ1メートルの紐を落としても、落下したときの形は毎回異なるように、世の中の基準とされているものではなく、揺らぎの中にこそ創造の可能性があるという視点です。

その上で示されたワークショップの6つのポイントは、①常識をひっくり返す、②“ものづくり”が目的ではない、③人(他者)との対話・かかわりの中で“自分”を見つける、④視点を替える、⑤新しい価値の発見、⑥自分の物差しを作り出すこと、であると解説されました。ワークショップとは、基準そのものを問い直し、関係性の中で価値を再構築していく運動であると強調しました。また、「子供」というより「人」として見る、という大巻さんのスタンスについても紹介されました。



### ■各地の事例

次に各地での取組が紹介されました。2014年の「世界のつくりかた」(美濃加茂市民ミュージアム/岐阜)では、地球や宇宙の誕生をテーマに、そのプロセスをどのように表現するか、子供から大人までさまざまな世代の参加者たちが約半年間対話を重ねました。通常の画材以外に、こんにゃくを持ち込んだり、傘や金網で無我夢中に板を叩き続ける人もいたそうです。アーティストがすべてを決めるのではなく、ファシリテートしながら、参加者のエネルギーを存分に発

散し合うワークショップだったと振り返りました。

2017年「破壊と創造の向こう側ー芸術家のうんこ」(アクティビG/岐阜)では、まず、参加者は「自分の大切なものを入れる器」を粘土で丁寧につくりました。そして大巻さんは、何も知らない参加者に自分の作品を壁に向かって投げつけるように伝えました。潰れたり広がったり、形が変わってしまった粘土が「いったい何に見えるか?」、参加者との間で感想の交換や見立ての対話を広げていきました。見たことのない形や、新しいイメージを生み出し、行為や価値そのものをひっくり返すアクションだとし、固定概念をも壊すワークショップとして紹介されました。

2018年に大分県日田市でのプロジェクトでは、日田の発祥にまつわる伝説を絵巻に描き、さらに木版画に展開しました。杉板の版木は硬く彫刻しづらいことや、人手不足などの試練を乗り越える過程で、学校や欄間の職人、住民へと協力の輪が広がり、共同体の再接続が促されたことが語られました。

2025年に香港の大館當代美術館で行われた《ECHOES-INFINITY》は美術館のホワイトキューブをどう解放できるか、どうやって市民と共有できる場をつくれるかを目的に、3週間で1,600組の家族と共同で制作を行い、展示室の床が砂絵で描かれた色とりどりの花で埋めつくされました。

展示会の最後にダンサーが砂絵の上でパフォーマンスし、色とりどりの砂はかき混ぜられ、ダンサーの痕跡へと変化しました。自分たちの文化が混ざり、新しいものがまた生まれるという、動き続け、鼓動する世界を表現したのだと語られました。

最後に介護福祉施設でのワークショップも紹介されました。施設の入所者のための依頼だとしても、そこで働いている人たちが入所者を理解するため、知るためにワークショップはあると大巻さん言います。誰かのために「与える」のではなく、自分に何ができるか自分に問うような、ニュートラルな関係性を取り戻すことが、ワークショップによって可能になるのだと大巻さんは力説しました。



## ■グループワーク：ワークショップを考える

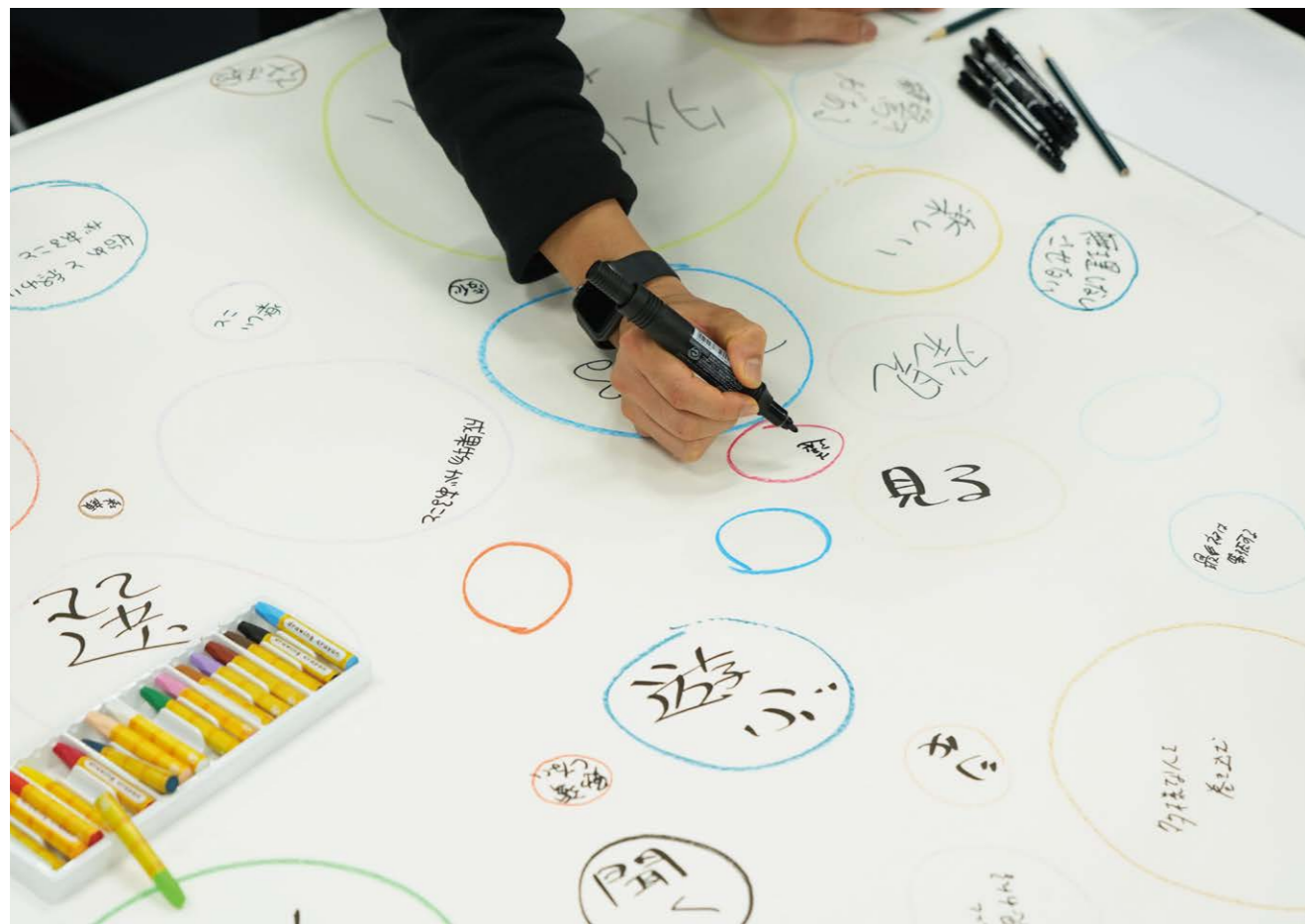
後半はワークショップをグループで企画しました。はじめに「ワークショップに必要なもの・こと、大切にしたい要素」や「自らの問題意識」について各自10個以上のキーワードを書き出します。続いてグループで一枚の大きな紙に、ひとり10個の円をクレヨンで描きます。色や大きさは自由です。円の中には、それぞれが最初書き出したキーワードを記入します。次にひとりずつ、キーワードの書かれた円と円を、線でつないでいきます。順番に結びつけることで、一連の「星座(コンステレーション)」のような関係図をつくります。こうして出来た星座のキーワードを元に、グループでワークショップを考えました。

大巻さんはグループをまわりながら対話を促しました。受講生同士の異なる背景や立場、そして考え方が一つの場に持ち寄られることで、違いが明確になりながらも、対話のなかで発想が繰り返し転換され、個人では思いもよらないアイデアやイメージが浮かびあがる瞬間もありました。

ディスカッション後、それぞれが話し合ったことを発表しました。各グループからは、親子のコミュニケーションをテーマに、親が子供の体重分の土を量り、それで子供が作品

をつくる企画や、住んでいる地域の宝物を探求するワークショップ、さまざまな国籍や文化、世代の人と、色々な素材で家や街をつくるプランなど、多様なアイデアが登場しました。

受講生からは「手を動かす」と「考える」が同時に起きると、普段出ない発想が自然と引き出されるのだと実感した、「普段の業務の中で知らず知らずのうちについていた考え方のクセ、のようなものが外れ、非常に脳が柔軟になったように感じた」といった驚きと喜びの感想が多く届きました。



## ■それぞれの解釈を見つける プロセスを共有する

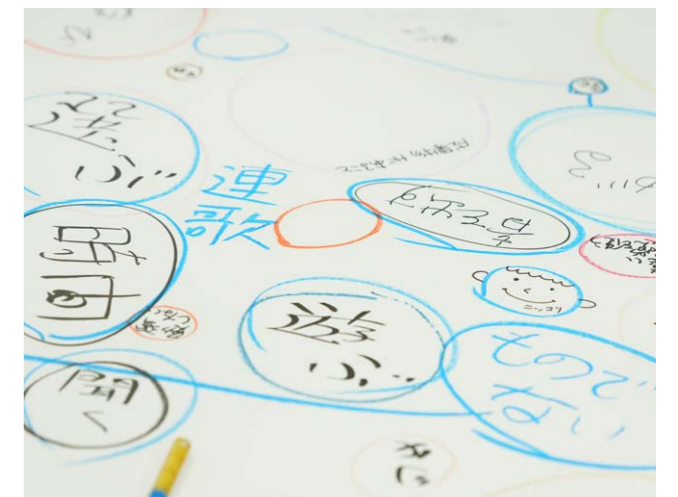
大巻さんからの各グループへの講評では、「自由／不自由」など、キーワードをあえて反転させることで発想を揺さぶり、直線的な思考から逸脱することで、新たな可能性が拓かれることが示されました。また、受講生が考える日常の問題を、アーティストとコラボして掘り下げてみることで、非日常的な素材と結び付けて新たなアイデアをつなげる提案もされました。背景にある個人の経験と社会の課題を結びつけることで厚みが生まれ、ワークショップはより多層的な意味を持ちうるということが伝えられました。



## ■最後に

大巻さんは、アーティストの立場からコーディネーターに対する思いを語りました。アーティストは「教える」存在ではなく「共犯者」であり、新たな価値観や解釈を見つけ出すプロセスを共有することで、「一緒になって実現するもの」と語りました。

そして、アートにおいて、個の存在を認めていく重要性や、「子供」という枠組みでなく「人」という感覚を捉えなおしてもらいたいとまとめ、講座を終えました。



## (2) 現場研修 概要

都立文化施設やアーツカウンシル東京の事業において、実際の子供向けのプログラムの現場を視察。現場でどのようなコミュニケーションや対応が、子供の想像力を育むことにつながるかを実践的に学びました。

### 現場研修先 一覧

プログラム名	回数	参加人数
東京芸術劇場 託児型ワークショップ「こどもあそびシアター」	6回	15名
東京都、アーツカウンシル東京 ほか ネクスト・クリエイション・プログラム	3回	6名
東京文化会館 ミュージック・ワークショップ	3回	10名
東京芸術劇場 劇場ツアー「コンサートホールを歩こう」	1回	5名
芸術家と子どもたち アーティスト派遣型ワークショップ 「PKT(パフォーマンスキッズ・トーキョー)」/ 「ASIAS(エイジラス)」	13回	24名
くにたち未来共創拠点 矢川プラス 絵本作家はたこうしろう ハロウィーンワークショップ 「世界にひとつのヘンテコぼうしをつくろう」/ ランチタイムコンサート「クラシックライブPLUS」	2回	5名
フレーベル館キンダープラッツ アリオ葛西店 「まんげきょうづくり」	1回	2名

## 東京芸術劇場

### 託児型ワークショップ「こどもあそびシアター」

保護者の観劇などに伴い、子供を預かり工作など自由な遊びの場を提供するワークショップ。

対象年齢は4歳から小学6年生。

受講生はスタッフとして子供たちの活動のサポートを行いました。

主催	※10月、11月は舞台芸術祭「秋の隕石2025東京」のプログラムとして実施 東京舞台芸術祭実行委員会[東京都、東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)] ※1月は「東京こども芸術文化プラットフォーム『TOKYOカルチャーデビュー』」の企画として実施 東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)
制作	一般社団法人あひるタイガ社
研修日程	10/12、10/25、11/1、11/3、1/10、1/11
会場	東京芸術劇場 アトリエースト
研修参加人数	15名

#### 研修後レポート抜粋(一部編集)：

・未就学児を連れての観劇は難しくとも、文化芸術の施設と一緒に来ることや、その場所に親しみを持つことに大きな意義を感じました。また、未就学児を持つ親にとっても、土日に託児型のワークショップを利用して自分のアート活動(映画鑑賞、展覧会鑑賞、習い事等)に時間を当てられるのは、とても嬉しいことだと思いました。

・子供たちのテンションやコンディションに合わせて、おやつやトイレのタイミングを柔軟に調整している点がとても素晴らしいと感じました。同時に、会場全体の空気感を読み取りながら活動を進めていくというのは、高い観察力と判断力が求められる作業であり、誰にでもできることではないと強く感じました。

・スタッフ自身楽しそうに工作に打ち込む姿があり、その空気感が子供たちにも伝わっていると感じました。大人が「見本」になることで、子供が安心

してその場に入っていける。やらせるのではなく、湧き上がるものを待つ姿勢が、結果的に子供の自主性を引き出していると感じました。

・何人かのお子さんと接する中で「何をつくっているの?」という問いかけに対して積極的に答えてくれるお子さんや、自分の世界に没頭しているお子さんなど、それぞれの遊び方があると実感し、その子に対してどのような距離感が適切なのかコミュニケーションをしながら理解していくことが大切だと考えました。

・今回、子供たちがとてもリラックスしてなんでも話しかけてくれる環境が素晴らしかったです。「一緒に、フラットな関係で遊ぶこと」とお聞きしましたが、そのスタイルが浸透しているのではと感じました。やりとりや受け答えを拝見し、その距離感や関わりすぎない配慮のバランスの大切さを学びました。



## ネクスト・クリエイション・プログラム

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が実施する子供向け芸術文化体験プログラムです。

子供たちがより深く、より高いレベルで学ぶことができるよう、自らが興味関心を持つクリエイションの現場に入り、各分野の第一線で活躍するプロフェッショナルから指導を受けることができます。

子供たちの芸術文化への夢や個性に寄り添いながら豊かな才能の開花を後押しすることをめざしています。

### ●こどもファッションプロジェクト

身近なファッションや洋服を題材に、各分野の第一線で活躍するプロの指導のもと、子供たちが洋服の制作やモデル、撮影などの役割に分かれて、楽しみながらファッションの世界を体験するプログラム。

対象は都内在住または在学・在勤の小学生から18歳までの方(各プログラムおよびコースにより異なる)。

受講生は子供たちがヘアメイク講座やウォーキングレッスンを受ける様子を視察しました。

主催	東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)
特別協力	株式会社ヒロコシノ
運営協力	文化服装学院
研修日程	10/19、10/26
会場	SABFA(原宿) / 東京都庁第二本庁舎1階・二庁ホール
研修参加人数	3名

#### 研修後レポート抜粋(一部編集)：

・かなりの長丁場であったが、自分の興味関心のあることだからか、最後まで集中して話を聞き、実践ではとても生き活きと取り組んでいる様子でした。好きなことに熱中する姿は、キラキラと輝いていました。

・子供たちの「できる」が育っていく姿が見られました。ニューヨークで最優秀賞を取ったプロから教わることは日常を超えているので消極的な生徒の「どうせ」と否定的な態度を払拭する力があると思いました。

・50名ものオーディションの中から選ばれただけあってか、半数くらいは自信がある印象を受けました。いざウォーキングが始まるとなると、緊張や不安の表情が見え隠れしていましたが、元々の意志やモチベーションも高い様で非常に意欲的に取り組んでいました。

### ●ファンタジスタ～アートとデザインで切り拓く未来のキャンパス～

自然の原理や物事の仕組みを学びながら、ワークショップをベースにしたアート作品制作と展示発表を複数回行います。

アートとデザインの作品づくりを通じて、正解のない課題にも臆せず創造性豊かに取り組む姿勢や自然環境を自分ごととして考え、前向きに未来へ進む力を培います。

受講生は、小学生コースのプログラムの一つ「Poiesis/全て自然物でつくる」にて子供たちの制作の様子を視察しました。

主催	東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、学校法人多摩美術大学
協力	葛西臨海水族園(公益財団法人東京動物園協会)、高尾の森わくわくビレッジ
協賛	京王電鉄株式会社、株式会社NTTドコモ
研修日程	10/26
会場	高尾の森わくわくビレッジ
研修参加人数	3名

#### 研修後レポート抜粋(一部編集)：

・子供・保護者への声の掛け方、プログラム設定のあり方などを今一度考えるきっかけになりました。

・展示発表の場が既にセッティングされており、子供たちに成功体験を積んでもらうために良い作品が出来上がるよう、講師や補助者の方が丁寧に付き添っていました。

・自然物だけを用いて自分の手で立体造形物を作る、ということから、造形にかかわる思考を養うだけではなく、環境問題に対する視点を育むことへつなげるというストーリーがあり、それを子供にだけではなく親御さんにもしっかりと説明し、子供と親で同じ問題意識を共有できるようにする、という点が特に印象に残りました。



## 東京文化会館

# ミュージック・ワークショップ

ポルトガルの音楽施設「カーザ・ダ・ムジカ」と連携して育成したワークショップ・リーダーによる、0歳から参加できるあらゆる人を対象としたワークショップ。

受講生はワークショップに参加する子供や保護者の様子を視察しました。

<b>主催</b>	東京都、東京文化会館(公益財団法人東京都歴史文化財団)

## ●旅するヨーロッパ Vol.3

ヨーロッパ各地の音楽や文化をテーマに、歌やリズム、身体表現を通して“音楽の旅”を体験する参加型ワークショップ。

<b>研修日程</b>	10/19(3～4歳対象の回)

<b>会場</b>	東京文化会館　リハーサル室
-----------	---------------

<b>研修参加人数</b>	1名
---------------	----

<b>研修後レポート抜粋(一部編集)：</b>	
・本物の音、ピアノ演奏を聴きながら、体を動かしリズム体操をしたり、とても贅沢な時間でした。カセットテープの音楽ではない本物の音色をきくこと、体験することはとても重要と感じました。初めての子で、会場には座れない荷物置き場の椅子に座っている子に対して、強制せず、子供のタイミングで	参加を促すことができました。楽器を取り出した途端に、会場内へ行く！と言い、子供自ら足を踏み入れました。各国の音楽に触れられるとても良い機会だと感じました。

## ●はじめましてクラシック～弦楽四重奏～

弦楽四重奏の演奏を間近に聴きながら、楽器の役割や響きの重なりを体感するクラシック初心者でも楽しめるプログラム。

<b>研修日程</b>	11/22(6か月～6歳[未就学児]対象の回)

<b>会場</b>	東京文化会館　小ホール
-----------	-------------

<b>研修参加人数</b>	5名
---------------	----

<b>研修後レポート抜粋(一部編集)：</b>	
・パパ、ママの間の席や、ママのお膝の上で、十分に楽しんで、時々飽きて、泣いて、笑って、また踊って。それぞれの表現でホールでの演奏会を味わっていました。意外だったのは、退出したり、出入りする方がほほいなかったこと。最初にずっと泣いていた子も外に連れ出されることなく、気づいたら泣き止んでいました。むしろ、同伴者の保護者の方が、「我が子と本物の音楽を聴く機会」を想定以上に楽しんでいる様子でした。ワークショップ・リーダーのリードに合わせて、子供の反応を見ながら子供以上に体を動かしていました。	・ほぼ満員だったのに驚きました。赤ちゃん～乳幼児がとて多かったため、終始泣き声や自由な発声が聞こえてきましたが、それを引くくめるための演奏会でした。何より、子供と楽しむ親の姿が、子供を見つめる優しい眼差しがとても温かく印象的でした。

## ●One Day コーラス

皆でコーラスする一体感や喜びを味わう合唱ワークショップ。小学生から大人まで参加可能。

<b>研修日程</b>	11/22

<b>会場</b>	東京文化会館　小ホール
-----------	-------------

<b>研修参加人数</b>	4名
---------------	----

<b>研修後レポート抜粋(一部編集)：</b>	
・「参加型」でありながら、明確な役割や成果を求めない設計は、学校現場でも参考になると感じました。	・今回のワークショップで学んだ全てが、今後の現場で大きく役に立つと感じました。特に、音楽のワークショップにおいて「どう参加者を巻き込み、楽しさだけでなく気づきや没入へ導くか」という観点は大変参考になりました。発想のヒントだけではなく、構造・展開の方法・参加者の巻き込み方という意味で、すぐに活かせる学びとなりました。

・プロフェッショナルの仕事を見せていただきました。洗練されたプログラムとそれを行うスキル(幅広い年齢層の集団を動かすことや歌や楽器の演奏など)があり、4人の息の合った分担で、音楽の楽しさやみんなでつくる面白さを全員が味わうことができたと思いました。	
--	--

・このワークショップは4人のリーダーの一人一人のスキルや専門性の高さがあることで成立していると感じました。そしてチームワーク。一人がメインの指導者になっている間、他の3人が楽器演奏で心地よい雰囲気をつくり、参加者のサポートにまわったりしていました。素晴らしいと思いました。選曲も世界各国のものや陽気なものや琴線に触れるようなものなどバラエティに富んでいることも豊かな時間を音楽を通して創っていると思いました。	
--	--

・今回のワークショップで学んだ全てが、今後の現場で大きく役に立つと感じました。特に、音楽のワークショップにおいて「どう参加者を巻き込み、楽しさだけでなく気づきや没入へ導くか」という観点は大変参考になりました。発想のヒントだけではなく、構造・展開の方法・参加者の巻き込み方という意味で、すぐに活かせる学びとなりました。	
・音楽が「見せるもの」「聴かせるもの」ではなく、同じ空間に居合わせる人々によって立ち上がっていく過程が印象に残りました。特に、参加者同士の声や反応がそのまま次の展開につながっていく点に、舞台芸術ならではの即時性と一回性を感じました。	

## 劇場ツアー「コンサートホールを歩こう」

ツアーガイドの案内で劇場の中や建物の周囲を歩き回り、ホールの特徴や建物の歴史など、劇場スタッフだけが知っている裏話も交えてご紹介します。対象は12～18歳。  
受講生はツアーを視察後、スタッフの振り返りにも参加しました。

主催	東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
研修日程	1/25
会場	東京芸術劇場 コンサートホールほか
研修参加人数	5名

## 研修後レポート抜粋(一部編集)：

・実際に、こういうガイドツアーから戯曲を書くワークショップに来た子がいたり、劇場に足を運ぶ様子など成果も聞けました。ガイドツアーの良さとして、体感する温度や湿度、音の響きや触れる壁など、五感で味わう事を盛り込んで実感につなげる話術の実践も学びになりました。

・ガイドのつけ方の案内が丁寧でスムーズで、足元注意の声掛けや移動の際など、こまやかな説明が各所でありました。今回のツアーは中高生対象ということで、開始前に申し込んだきっかけなどを参加者に質問し、その内容をガイドの中で生かそうとする工夫などが見られました。

・ガイドの方の「子供扱いしない」ということ、ところどころ専門的な言葉を用いつつも、説明を重ねてわかるようにフォローしていくという方法もとても印象深かったです。

・参加者の中高生が、スマホで写真を撮ったり、iPadにメモしたりしながら聞いていました。筆記では無くICTを活用しているのが今時の世代だと感じました。ガイドのお二人の案内に、素直に耳を傾けたり、見渡したりする姿が、純粋に楽しんでいると感じられました。

・説明は過度になりすぎず、体の感覚を開くように、移動しながら音を聴く、触れる、見上げるといった体験を織り交ぜた飽きのこない進行と、物語性のある構成も印象的でした。また、普段は立ち入れない裏舞台を見せていただけの点も、参加者の高揚感につながっていると感じました。



## アーティスト派遣型ワークショップ

## ●PKT(パフォーマンスキッズ・トーキョー)

ダンスや演劇、音楽などの分野で活動するプロの現代アーティストを、都内の小中学校・特別支援学校などに派遣し、10日間程度のワークショップ型授業を重ね、子供たちが主役の舞台作品をつくり、発表を行います。  
受講生はアーティストの指導による練習の様子や子供たちの発表を視察しました。

主催	アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
助成・協力	東京都
研修日程	11/1、11/5、11/11、11/21、12/3、12/5、12/16、12/19、12/20、12/26
会場	都内小学校、児童養護施設
研修参加人数	17名

## ●ASIAS(エイジias)

アーティストが、学校教育の現場、児童福祉の現場、矯正教育・医療・地域の現場などへ出かけていって、先生・職員と協力しながらワークショップを実施します。

研修日程	11/9、12/14、1/11
会場	地域の子供の居場所
研修参加人数	7名

## 研修後レポート抜粋(一部編集)：

・ありのままの子供を受け入れること、否定したり、注意したりを極力しないこと、やってもやらなくても強制しないことなど、子供との関わり方を改めて学ばせていただきました。学校の現場にいてどうしてもやらせることが多くなってしまっているので、やらせることが全てではなく、教師側である大人たちが子供一人ひとりを受け入れることが大切であることを学ばせていただきました。

・学校という枠組みの中では、これほど自由に振る舞うことは難しい。一方で、遊びを通して発散し、他者と関わることのできる第三の居場所は、特に都市部で暮らす子供たちにとって、自分を受け入れてもらえる開放的な時間と場所になっていると感じました。

・身体を動かして表現することが得意な子供、不得意な子供がいると思いますが、上手下手を気にすることなくそれぞれがそれぞれの表現をすることを受け入れる場ができてるように思えました。自分自身で考えたものを表現して、それが受け入れられるという経験は子供の自信を形成するうえで非常に貴重なものだと思います。

・このワークショップに参加して、子供たちだけでなく、私たち大人にとっても同じような意義があるのではないかと実感しました。自分を解放することで、心から楽しめる空間が生まれていたことがとても印象的でした。

・自分が自分のままでいられる居場所、上から目線の大人がおらず、一緒に目線で過ごしてくれる心地よさがあるように見えました。

・みんなで考えた動きやポーズをつなげていくのは、まるでひとつの物語を紡いでいくようで、それぞれのアイデアが少しずつ重なり合い、ダンスが生まれる瞬間となっていました。

・コーディネーターさんが子供たちの様子や安全面に配慮しながら、みんなが楽しめるサポートを行っている姿が心に残りました。

・子供たちのその日の気持ちに寄り添う配慮がされていました。課題を押し付けなくて気分が乗るまで待ったり、違う提案をして反応を見たりする姿勢がみられてよかったです。

・取り組み方や子供の年齢や特性、能力には違いがあるものの、ダンサーが引き出しているのは人の中にある本能的で野生的な感覚や普遍的な美だったりすると思います。そうしたことは音や動きがもたらす刺激の強さや、人と人がつながることが純粋な喜びであることや、アーティストの表している事が真っ直ぐ伝わることなどに起因すると思います。そして、それは制度や沢山の人のによって支えられているなと思いました。

くにたち未来共創拠点 矢川プラス

## 絵本作家はたこうしろう ハロウィーンワークショップ 「世界にひとつのヘンテコぼうしをつくろう」

絵本作家のはたこうしろう先生と、さまざまな素材を自由な発想で組み合わせて世界にひとつだけの「ヘンテコぼうし」をつくります。受講生は運営スタッフの説明を受けながら制作の様子を視察しました。

主催	く <span>に</span> たち未来共創拠点 矢川 <span>プ</span> ラス(社会福祉法人く <span>に</span> たち子どもの夢・未来事業団)
研修日程	10/19
会場	く <span>に</span> たち未来共創拠点 矢川 <span>プ</span> ラス
研修参加人数	4名

<b>研修後レポート抜粋(一部編集)：</b>	
・完成後には、「自分がつくった」という達成感から、満面の笑みで帽子を被り、互いの作品を見せあう姿が見られ、自己肯定感の向上につながっていることが見て取れました。	・「創造を刺激する」素材の配置：制作材料が種類別、色別に豊富に用意され、子供たちが一目で興味を持てるよう展示されていました。単に材料を置くのではなく、「どのように見せるか」という展示デザインが創造性を高める工夫となっていました。
・小さいことですが、材料のボンドについて「たくさん出したらくっつかない、不思議なボンドです。ちょっと出して、よく伸ばす」とご説明されていて、子供たちがドバツと出してしまうことを「ダメ」という表現を使わずに注意していて、とても参考になりました。	・親子共同作業への明確な誘導：保護者も帽子づくりに参加することで、単なる見学者ではなく、子供と共に制作の主体となるよう促されていました。

・アイスブレイク〜帽子の作成方法まで、前のモニターにみんなを集めてやることで、心理的な距離が近くなり、みんなで良い場をつくろうとする一体感が生まれていました。

### ランチタイムコンサート「クラシックライブ PLUS」

お子さんが泣いても、踊っても大丈夫な、親しみやすく楽しいコンサート。プロの演奏家による生演奏を聴いて、素敵なランチタイムを提供。

受講生は運営スタッフの説明を受けながら、参加する子供や保護者の様子を視察しました。

主催	く <span>に</span> たち未来共創拠点 矢川 <span>プ</span> ラス(社会福祉法人く <span>に</span> たち子どもの夢・未来事業団)
研修日程	11/12
会場	く <span>に</span> たち未来共創拠点 矢川 <span>プ</span> ラス
研修参加人数	1名

<b>研修後レポート抜粋(一部編集)：</b>	
・曲紹介を挟み、全年齢楽しめる内容でした。「頭肩膝ポン」「おもちゃのチャチャチャ」など参加型の曲でテンポ変化をつけてチャレンジ精神を引き出していました。音量音色共に優しめでした。電子ピアノの音量もやや小さめ。ベンチ席の隙間にベビーカーを置けるスペースがあり、揺らしながら親子で鑑賞できるゆとりがありました。各所にスタッフが常駐し、	演奏中の出入りも円滑でした。「スマホを置いて一緒に観賞しよう」という旨のアナウンスを入れていました。後方のテーブル席や畳席で離乳食などを食べながら鑑賞できる環境でした。

フレーベル館キンダーブラッツ アリオ葛西店

## 「まんげきょうづくり」

商業施設・アリオ葛西店内にある室内遊び場「キンダーブラッツ」のものづくりワークショップ。3〜5歳の子供たちを対象に、一人一つずつ万華鏡を作成します。

主催	株式会社フレーベル館
研修日程	1/23
会場	キンダーブラッツ アリオ葛西店
研修参加人数	2名

<b>研修後レポート抜粋(一部編集)：</b>	
・万華鏡という仕組みを説明する際に、実際の鏡を使い、人形を映しながら鏡の枚数を増やしていく説明方法が非常に分かりやすく、子供たちの興味を自然に引き出していました。また制作の最後に自由なお絵描きの時間を設けていたことで、作品の完成度を競うのではなく、子供自身の発想や表現を広げていく意図が感じられ、とても印象に残りました。	・ワークショップの材料や道具以外のものも使ってOKにするなど、子供たちの創意工夫の気持ちを妨げないような配慮がされており、決まったことをやりつつ決めすぎないバランスが素晴らしいかったです。
	・大人が手助けしてただつくるのではなく、まず構造を把握したり理解したりすることは、子供たちが今後新たな遊びや工夫を生み出す手助けにもなるので、こういったイベントを行う際は「なぜ？」の部分にも子供たちがきちんと向き合う時間をつくろうと思いました。

### (3) 振り返り共有会

講座期間を通じて得た学びや気づきを他の参加者と共有し、今後の実践活動に活かすための振り返りを行いました。

2026.2.21(土) 14:00~16:00 アーツカウンシル東京 会議室

全6回の基礎講座と、2回の現場研修を終えた受講生たちが一堂に会する最後の機会です。

自分自身がコーディネーターとしてめざす姿を明確にするため、3つのワークを行いました。

#### ■本プログラムでの「気づき」を共有

はじめに、基礎講座の講師の言葉や現場研修での気づきなど、印象に残っていることを付箋に書き出しグループで共有しました。これまでは、多角的な視点が得られるよう、異なる職種の方とグループを組んでいましたが、今回は自分の立場に引き寄せてテーマを捉えることを目的に、文化施設の職員や学校の教員、企業の方などなるべく近い職種の方同士でグループワークを実施しました。

受講生からは「子供だからといって子供扱いしない」や「コーディネーターが面白がること」などのキーワードが出ました。

机の上の模造紙に付箋を貼りながら共通点をまとめていくことで、コーディネーターの役割や持つべき視点が改めて整理されました。また、自分が参加していない現場研修先の事例についても、お互いの視点や気づきを持ち寄り、実践に向けた視野を広げることができました。



#### ■コーディネーターとして大切なこととは？

次のワークでは、受講生が自身のこれからの見据え「コーディネーターとして大切だと思うこと」をグループでディスカッションしました。講師陣やさまざまな子供向け事業の現場から学んだことを土台に、自身の考えとして捉えなおす作業です。

まずは一人ひとり付箋に記入し、その後、グループで新しい模造紙に付箋をマッピングしながら、似ている考えを近づけてみたり、内容や着眼点ごとにカテゴライズしてみたり。その中で特に印象に残ったキーワードを3つ選び、グループごとに全体に向けて発表しました。

文化施設の職員であるAグループは「心理的安全性(場のこと)／面白がる姿勢(コーディネーター自身のこと)／知ること(相手のこと)」の3つを挙げました。「相手を知るといのは、来なかった人のことを知ろうとすることも必要なのではないか」と述べると、会場中から「うーん、なるほど」という感嘆の声が上がりました。



また、学校の教員であるGグループは、「文脈/同じ目線/体験」というキーワードとともに、基礎講座第5回で白井さんから学んだペン図を早速活用して課題を整理したことを明かしました。子供たちの背後にある保護者や地域にも目を向け、そして知識の一方的な伝達だけでなく、子供にとっての体験を豊かにしていくことの重要性について述べました。

他のグループからも次のようなキーワードが挙がりました。

Bグループ

「企画を深める作業/子供の主体性を大切に/子供とともに動く・遊ぶ・わくわくする」

Cグループ

「理念や思い/場作り/三方良し」

Dグループ

「安心・安全な環境/一緒に楽しむ・同じモノを見る/コミュニケーション」

Eグループ

「わくわく/見つめる/つなげる」

Fグループ

「問い続ける/心の健康/モヤモヤ」

Hグループ

「好奇心/能力/持続化」

どのグループも、講師の言葉や現場研修でのスタッフの姿勢などを紐解きながら、自分たちの言葉を導き出していました。そして、コーディネーターは調整役にとどまらず、自らも主体的に関わり続ける存在であるという視点が共通項として挙がりました。

#### ■「こととて」として 明日から取り組みたいこと、そして...

最後に、講座全体を締めくくるワークとして、今後の実践につなげるための目標設定を行いました。自分が「明日から取り組みたいこと」と「将来的に達成したい目標」の2点をカードに記入しました。「将来」とは具体的に何年後のことを指すのかも、それぞれの受講生が設定しました。



2つの目標を書き記すことで、講座で得た知識や経験、出会いを自身の実践へと結びつける意識が高まり、実際の行動へと移す準備を整えました。ここでプログラムは終了です。

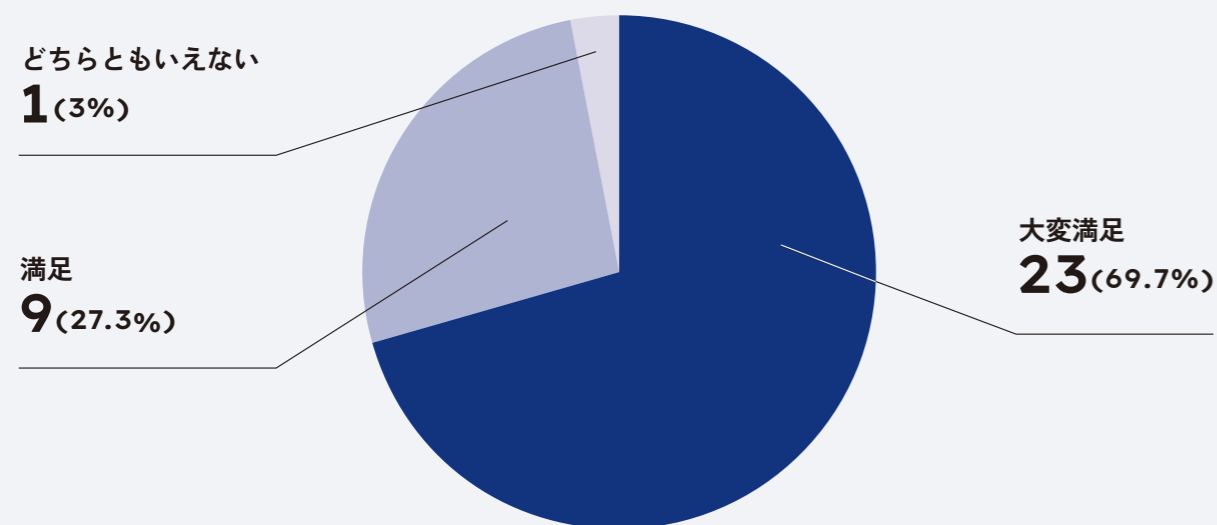
修了証が手渡されると、受講生たちはほっとしたような晴れやかな表情で、9月からのプログラムを改めて思い返していました。そして修了証の右半分に、先ほど書いた目標のカードを貼り付けました。



このコーディネーター養成プログラムは、子供たちへ芸術文化体験を届けたいという同じ思いを持つ受講生同士が、多様な立場を生かして共に学び、そして今後へさらに活動を広げるための視野とネットワークを広げる機会となりました。

## 4 受講生アンケート

### 講座全体の満足度



### ■受講前と受講後でどのような変化がありましたか？

・文化芸術活動がなぜ子供(や地域コミュニティ)のためになるか、自分のなかで答えが見つかった気がします。

・アートが、世代、ジャンル、地域を超えて、横断的に、ひとの意識と存在をつなげる「社会のインフラ」であることを認識しました。アートプログラムの存在意義を、さまざまな角度から言語化できたことは、大きいです。

・これまでは知名度のあるアーティストを起用することが集客や話題性につながると無意識に考えていましたが、むしろ同じ社会課題意識や価値観を共有できる人と協働することのほうが、結果的に持続性のある活動につながるのではないかと考えるようになりました。「誰と組むか」という基準が、肩書きや知名度から“志”へと変化したことが、自分にとって大きな変化です。

・大学で学芸員資格を取ろうと思いました。資格が文化施設への就職に必ずしもつながるわけではありませんが、知識を増やしたいこと、人とつながり、何かを生み出す力の土台を養いたいと思いました。ワークショップを行う企画案を提出するなど、行動を起こしはじめています。受講生同士のつながりもでき、情報共有の場も増えました。

・多角的にコーディネーターの視点を知ることができ、アーティストの立場や存在意義も感じられた事は大きな事でした。講座を受けるたびにさまざまな事が自分事として受け止められるようになりました。

・自身の活動がより積極的に意欲的になりました。またさまざまな講師や受講生と行ったグループワークやコミュニケーションを通じて、自分の視野が広がり、考えが広がるきっかけになりました。

・企画するうえで大事なことを学びました。また、対象となる子供の10年先を見据えて考えること、親も巻き込む必要性を理解しました。これまでは目の前の子供のことを思っているいろいろな行事を企画していましたが、今後はその背景の親や地域の事も考えた行事を企画したいと思います。

・イベントは単なる“場づくり”ではなく、アーティストにとっては創作活動の場でもあるという視点の重要性に気づきました。主催者の目的だけでなく、アーティストが何を表現したいのか、その創作をどう支えられるかを同時に考える必要があると感じるようになりました。

(掲載にあたり一部編集しています。)



子供向け芸術文化体験コーディネーター「ことととて」養成プログラム 2025年度事業報告書

主催 東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）  
運営 CINRA, Inc.

編集 東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、CINRA, Inc  
発行者 ©公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
発行日 2026年3月31日

本報告書に掲載の画像等の無断転載をお断りします。  
所属・肩書等は発行当時の情報に基づきます。